ネヘミヤ記10章 「礼拝のための誓い」

1A 盟約に署名した者たち 1－27

2B モーセの律法に歩む誓い 28－38

1B 指導者たちとの歩調 28－29

2B 礼拝に向けての誓い 30－38

1C 釣り合わぬ婚姻 30

2C 安息日と安息年 31

3C 礼拝のためのシェケル 32－33

4C 祭壇のための薪 34

5C 土地の初なり 35

6C 初子 36－37a

7C 什一 37b－39

本文

ネヘミヤ記 10 章を開いてください。私たちは、ネヘミヤ記にて、「いかにして、神の民を建て上げ、堅く守る」ということを見て行っています。後半から、「神のことばに基づいた、新しい生活様式」を築き上げようとしています。モーセの律法の朗読から始まり、イスラエルの祭りを守り、それから、悔い改めのための長い祈りを捧げました。それが 9 章です。そして 10 章では、その祈りの直後に、主にあって盟約を結びました。9 章の最後を見てください、「9:38 これらすべてのことのゆえに、私たちは文書をもって盟約を結んだ。そして、私たちの高官たち、レビ人たち、祭司たちはそれに印を押した。」主の律法を聞いて、祈りの中で悔い改めて、それに基づく生活を送るための盟約です。

私たちは、緊急事態宣言が終っていますが、コロナがなくなったわけではないから、「新しい生活様式」の中で生きなければいけないと専門家の方々からの提言を聞いていますね。今までは当たり前にしていたものを避けて、新たな様式、やり方で日常生活を送ります。しかもしれを、国全体で行うからこそ意味があるので、日本国民全体が新しい生活様式を当てはめようとしています。ネヘミヤの時のイスラエル人たちも、これ以上の生活の変容を迫られていたと思います。これまで、当たり前のようになっていたことが間違っていたことに気づきました。そして、命じられたことについて、ずっと行ったこともないようなことです。新しく生きることが迫られます。教会に対しても、同じような新しい習慣を身に着けるように命じられています。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」

1A 盟約に署名した者たち 1－27

1a 印を押した者は次のとおりである。ハカルヤの子の総督ネヘミヤ、

初めに印を押したのは、総督ネヘミヤです。

1b およびゼデキヤ、2 セラヤ、アザルヤ、エレミヤ、3 パシュフル、アマルヤ、マルキヤ、4 ハトシュ、シェバンヤ、マルク、5 ハリム、メレモテ、オバデヤ、6 ダニエル、ギネトン、バルク、7 メシュラム、アビヤ、ミヤミン、8 マアズヤ、ビルガイ、シェマヤ。以上は祭司たちであった。

次に印を押しているのは、祭司たちです。

9 レビ人では、アザンヤの子ヨシュア、ヘナダデの子らのうちのビヌイ、カデミエル、10 および彼らの親類で、シェバンヤ、ホディヤ、ケリタ、ペラヤ、ハナン、11 ミカ、レホブ、ハシャブヤ、12 ザクル、シェレベヤ、シェバンヤ、13 ホディヤ、バニ、ベニヌ。

次は、レビ人たちが印を押しました。祭司とレビ人の違いは、祭司は、神殿の聖所の中にまで入って、主に仕える人々です。祭壇にて、牛や羊のいけにえを屠り、血を取り、その肉を火で焼きます。そして聖所に入って、臨在のパンと呼ばれるものを神の前に備え、また燭台の灯を整えます。そして香壇があり、そこで香をたきます。年に一度、宥めの日に大祭司が垂れ幕を通って至聖所に入り、イスラエルの罪の贖いをします。こうしたことを行いますが、レビ人は、こうした礼拝の周りでの奉仕です。かつては、幕屋の時はその取り外しと、再び組み立てる、そしてそれを運ぶ奉仕をしていました。

けれども、神殿はもちろん、そんな奉仕はもう必要ありません。ダビデが神殿建設の準備をしていた時に、彼らを歌うたい、そして門番の務めにつかせたのです。歌うたいは、絶えず神殿に賛美が主に捧げられるようにするためです。詩篇は、主に歌うための歌詞であります。天においては、絶えず主に対する歌がうたわれています。そして、門番は、主を礼拝する聖なる所を、部外者が入ってくることのないように守るためのものです。初めの門番は、御使いケルビムでした。エデンの園の入り口を、炎の剣で守っていました。聖なる所を聖なる所として守るためです。私たちの礼拝でも、二つの要素はいつもあります。賛美があり、そして案内する人がそうです。また、教会の人たちが、礼拝者が心から礼拝できるようにするための配慮をしていますね。

14 民のかしらでは、パルオシュ、パハテ・モアブ、エラム、ザト、バニ、15 ブンニ、アズガデ、ベバイ、16 アドニヤ、ビグワイ、アディン、17 アテル、ヒゼキヤ、アズル、18 ホディヤ、ハシュム、ベツァイ、19 ハリフ、アナトテ、ネバイ、20 マグピアシュ、メシュラム、ヘジル、21 メシェザブエル、ツァドク、ヤドア、22 ペラテヤ、ハナン、アナヤ、23 ホセア、ハナンヤ、ハシュブ、24 ハ・ロヘシュ、

ピルハ、ショベク、25 レフム、ハシャブナ、マアセヤ、26 アヒヤ、ハナン、アナン、27 マルク、ハリム、バアナ。

ここでは民のかしらたちが、印を押しています。

初めに総督ネヘミヤ、次に祭司、次にレビ人、そして民のかしらたちです。ネヘミヤは、良い指導者でした。ここで封印をしていて、それで自らが破ったのであれば、責任を彼自身が取ることになります。まず、その責任は自分にあるとするのが指導者の姿です。

そして祭司たちが印を押しているのは、彼らがかつて罪を犯していたからです。預言者エゼキエルは、自分自身が祭司であり、礼拝における奉仕についての幻を多く見ました。そこで神殿の中で人々が偶像礼拝の罪を犯しているのを彼は目撃しました。神の民が堕落したのは、その中心にある礼拝生活が汚されたからです。「エゼ 22:26 その祭司たちはわたしのおしえを冒瀆し、わたしの聖なるものを冒し、聖なるものと俗なるものとを分けず、汚れたものと、きよいものとの違いを教えなかった。また、彼らはわたしの安息日をないがしろにした。こうして、わたしは彼らの間で汚されている。」そしてレビ人は、その礼拝を補佐する働きをしていますから、祭司の次に罪があります。それから、民のかしらたちです。今、読んだエゼキエル 22 章 26 節の次は、かしたたちの罪が暴かれています。「27 その町の高官たちは、獲物をかみ裂く狼のようだ。人々の血を流し、たましいを滅ぼして、自分の利得を貪っている。」こうした、律法に背いた事実を彼らは知ったので、祭司、レビ人、そして民のかしらの順番に、悔い改めている証しとして印を押しています。

2B モーセの律法に歩む誓い 28－38

1B 指導者たちとの歩調 28－29

28 このほかの民、祭司、レビ人、門衛、歌い手、宮のしもべたち、また、諸国の民と関係を絶って神の律法についた者全員、その妻、息子、娘たち、すべて理解できるまでになった者は、29 彼らの親類のすぐれた人々と歩調を合わせつつ、神のしもべモーセを通して与えられた神の律法に歩み、私たちの主、主のすべての命令、その定めと掟を守り行うという、次のような、のろいの誓いに加わった。

印を押して名を書き記していない人々も、それぞれの自分の親類の代表的な人たちが名を記したので、それに歩調を合わせました。次から書かれている内容は、モーセの律法に書かれてあることで、違反したら呪われるということも書かれているものであり、その誓いに加わっています。

ところで、その誓いに加わった人々は、「諸国の民と関係を絶って神の律法についた者全員」といっています。当時、異邦人の住民に囲まれてきて生活していた彼らは、周囲の神を知らない人々と歩調を合わせていて当然でした。そして、これからも周囲の人々と共に生きることには変わ

りません。しかし、共に生活することと、その価値観を共有することとは話は違います。神を第一にしていきるなら、自分の住んでいるところでの共同体との関係が、ある部分では断ち切らなければいけないものがでてきます。そして、神を第一にする共同体の中にいる者として行動するように変化していかなければいけません。

イエス様は、そのことを何度となく語られました。決して親を憎むのではありません、肉の兄弟や姉妹を憎むのではありません。けれども、イエスを主として、この方の御言葉に聞き、それを実践するように決めた者たちの間には、新たな結びつきが生まれ、肉の家族には、自分たちが切られたと感じて、何とかして引き戻そうとする圧力を受けるのです。母や兄弟たちがイエス様を引き取りに来ようとしたことがありました。「マル 3:33-35 すると、イエスは彼らに答えて「わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか」と言われた。そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」ルカの福音書では、「14:26 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」と言われました。憎むとは強い言葉ですが、感情においてではなく、それだけ強い意志、決断を意味しています。

2B 礼拝に向けての誓い 30－38

1C 釣り合わぬ婚姻 30

30「私たちの娘をこの地の民に与えず、また、彼らの娘を私たちの息子の妻としない。

呪いの誓いの一つ目は、周囲の住民との婚姻をしない、ということです。エズラ記を読んでも、ネヘミヤ記を読んでも、この点が最も強調されています。周囲の人たちと暮らしているのですから、それはごく普通の営みです。ところが、律法では禁じられていました。「申 7:3 また、彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。」理由が書いてあって、「7:4 というのは、彼らはあなたの息子を私から引き離し、ほかの神々に仕えさせ、こうして【主】の怒りがあなたがたに向かって燃え上がって、あなたをただちに根絶やしにするからである。」ということです。その婚姻自体が間違っているのではなく、自分たちの神々を否が応でも持ち込んでしまうので、いずれ神々に仕えるようになってしまう、ということであります。そして、このことをソロモン王がその晩年に見事にやってしまいました。300 人の妻、700 人の側女を持ち、そこには異邦人が多くいて、彼女たちが持ち込んだ神々を祀るために、高き所をエルサレムの山に作ってしまったのです（Ⅰ列王 11:1-8）。

私たちも多神教の信仰を持っている日本に住んでいますから、よくわかると思います。それぞれの場で敬われている神々を敬わないといけない、という考えです。エジプトにいればエジプトの神々を、カナンに入ればカナンの神々を、ということで、地域にある神々を敬わないといけないとす

る考えです。関係を持っている人々が敬っているものを、自分も敬わないといけないとして、それで必ずしも自分が心からそれを信じているわけではないけれども、敬意を表する行動に取るわけです。仏式の葬儀では、それが顕著ですね。ですから、私たちの生活は絶えず、このような過ちとの戦いあります。「教会に来れば、教会の神をあがめる。けれども、教会から出たら、そこで大事にされているものを大事にする。」ということです。二重生活、二面性のある生活を送る誘惑があります。これが偶像礼拝の本質です。ある時にはこの神、またある時はあの神、となるわけです。そうした関係から断ち切る必要があり、その最たるものが婚姻関係であります。

キリスト者は、キリスト者ではない人との婚姻は強く勧めません。罪を犯すことになるとは思いません、その律法が新約聖書では繰り返されていないからです。けれども、結婚はキリストと教会を表していると書かれており、キリストを知らない人と結婚をして、その象徴しているものを表すことはできません。主に従いながら、夫に仕える、あるいは妻を愛することがとても難しくなります。そして、自分自身が信仰から離れることが大きいのです。もちろん、結婚してから途中で信仰を持ったという方々は、それは第一コリント 7 章で、自分がキリスト者ということで、その結婚も聖なるものとされているとパウロは教えています。問題は、自分は既に信仰を持っているのに、不信者と結婚することです。「Ⅱコリ 6:14 不信者とつり合わないくびきをともにしてはいけません。」

2C 安息日と安息年 31

31 諸国の民が安息日に商品、あるいはどんな穀物を売りに持って来ても、私たちは安息日や聖なる日には彼らから買わない。また、私たちは七年目には土地を休ませ、あらゆる負債を免除する。

周囲の民と暮らしていて、主との関係が壊れてしまう、二つ目の懸念は、安息日です。安息日は、主によって、イスラエルが聖なる民であることを表すためであることが教えられました。「出 31:15-16 六日間は仕事をする。 しかし、 七日目は【主】の聖なる全き安息である。 安息日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。イスラエルの子らはこの安息を守り、永遠の契約として、代々にわたり、この安息を守らなければならない。」けれども、他の民は普通に、安息日にも商売をしています。ですから、自分たちも商売しないと大きな経済的損失を被るかもしれません。けれども、それでも安息を守るのです。ですから、これは彼らにとって大きな決断であります。

今は、安息日はキリスト者として律法として与えられていません。キリストが安息日の実質であり、この方にあって成就したことを、コロサイ書は教えています。しかし、「聖なる日」とありますが、立ち止まって、主の御名をあがめる、聖なるものとする時、日が必要なのは言うまでもありません。教会は、集まって、主を礼拝するように命じられており、それをいつもの仕事があるからとして二の次にすることは、周囲の神を知らない人々と歩調を合わせることになります。主の御名をあがめる礼拝は、時間が空いたら行うものではなく、最も大事な時間として確保するものです。「ヘブ 10:25

ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」

そして安息には、もう一つの意味合いがあります。安息年、すなわち七年に一度、土地を休ませるのですが、そこには、労働している貧しい人々や家畜を休ませ、その収穫を食べさせるという目的があります（出エジプト 23:11）。ですからここにあるように、七年毎に負債の帳消しをします。同胞の民で貧しい人々に施しをする、あるいは弱い人々を助けるのです。まず、土地が主のものであることを覚えます。そして、他の人々にも休みと自由を与えます。これにも挑戦が必要でしょう。しかし、自分の土地は自分で守っているのではなく、主から来ているものだとしなければ、なりません。それが、信仰というものです。さらに、隣人への憐れみを示しているか、負債を免除しているか？が試されます。

3C 礼拝のためのシェケル 32－33

32 私たちは、自分たちの神の宮での礼拝のために、毎年シェケルの三分の一を献げる義務を自らに課す。 33 これは、並べ供えるパンと常供の穀物のささげ物のため、常供の全焼のささげ物のため、安息日、新月の祭り、例祭、聖なるささげ物のため、そしてイスラエルの宥めを行う罪のきよめのささげ物のため、および私たちの神の宮のすべての用途のためである。

四つ目の誓約は、礼拝への捧げ物になります。神の宮の礼拝のためのシェケルですが、これは律法においては二分の一が定められています（出 30:11-16）。しかし、おそらく彼らは経済的に逼迫していたのでしょう、三分の一に減らしています。時にこのような対処が必要ですね、律法も大切ですが、神の憐れみがあってこそ、です。そして、その用途は、主を礼拝するための穀物の捧げ物や動物のいけにえのためです。

キリスト教会において、罪のための供え物はキリストにあって神に捧げられました。そして、その神の恵みに応答して、喜んで捧げることが求められています。礼拝を捧げるために、もちろん今は、穀物もいけにえも必要ないですが、けれども、礼拝の場所は必要ですし、光熱費はかかりますし、機材も必要です。そういった物理的なものがあってこその霊的な礼拝なので、前者をおろそかにすることは、霊的なことをおろそかにしているのと変わりません。私たちが聖霊の宮になったということから、心だけがそこにあればよいのだとして物理的なものを考えることは、旧約時代のことだと考える人は、かつてグノーシス主義という異端がありましたが、その異端の教えに近づいてしまいます。聖霊の宮になったんですから、私たちは自分の心だけでなく、体を運んできて、それで初めて心も運んでくることができます。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

4C 祭壇のための薪 34

34 また私たち、祭司とレビ人と民は、薪のささげ物について、毎年定められた時に、父祖の家ごとに神の家に携えて来ることを、くじによって決める。律法に記されているとおり、私たちの神、主の祭壇の上で燃やすためである。

四つ目の誓約ですが、祭壇の薪についてです。毎日、いけにえを捧げるのですから必要なのですが、ユダの土地は日本のように木々が生い茂っているのではなく、稀少な資源です。ですから、これも祭司やレビ人も含めて分担して誰かに負担が重くのしかからないようにしました。このように、負担を分担するということも、私たち主に仕える者たちには必要な配慮です。

5C 土地の初なり 35

35 また、私たちの土地の初なりと、あらゆる木の初なりの果実をすべて、毎年、主の宮に携えて来ることに決める。

五つ目の誓約です。初穂の日が過越の祭りの三日目に定められており、それは大麦の初穂です。そして五旬節では小麦の初穂が捧げられます。箴言においても、次の命令があります。「3:9 あなたの財産で【主】をあがめよ。あなたのすべての収穫の初物で。」

残された物ではなく、初物なのです。初めに与えられた収穫を捧げるということは、勇気のいることです。自分が汗水流してもうけたものですから、それをいきなり、主の宮のために捧げるとは、いったいどういうことだ？となるかもしれません。けれども、そもそも収穫を与えるのはだれでしょうか？自分が稼いだのだというのは、主の前では高慢です。誰がその力を与えたのでしょうか？誰がその機会や時間を与えたのでしょうか？まず、主に初物を捧げることによって、初めて、自分が主を主としていることを示しています。

私たちは、まず収入が与えられたら、その時に主を覚えましょう。そして、主に献げる分を取り分けておくのです。「Ｉコリ 16:2 私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。」

6C 初子 36－37a

36 また、律法に記されているとおり、私たちの子どもと家畜の初子、私たちの牛や羊の初子を、私たちの神の宮に、私たちの神の宮で仕えている祭司たちのところに携えて来ることに決める。
37 また、私たちの初物の麦粉と奉納物、およびあらゆる木の果実、新しいぶどう酒と油を祭司たちのところに、私たちの神の宮の部屋に携えて来る。

初物だけでなく、初子も捧げられます（出エ 13:1）。家畜であれば、神の宮でほふります。子供

であれば、羊で贖いをしますので、羊を屠ります。自分の初子を捧げることによって、自分の命は主のものだということを告白しています。イエスを主とすることは、自分の初穂、初子を捧げることに他なりません。神ご自身が、ご自分の初子、イエス様をくださいました。それゆえ、今度は私たちが、この神の恵みを自分のいのちにまさるとみなすのです。

7C 什一 37b－39

37b-39 また、私たちの土地の十分の一はレビ人たちのものとする。レビ人は、私たちの耕作するすべての町から十分の一を受け取る者たちである。38 レビ人が十分の一を集めるとき、アロンの子孫である祭司が、そのレビ人とともにいなければならない。レビ人は、その十分の一の十分の一を私たちの神の宮へ携え上り、宝物倉の部屋に納めなければならない。 39 この部屋に、イスラエルの子らとレビ人たちは、穀物、新しいぶどう酒、油の奉納物を携えて来るようになっているからである。そこには聖所の用具があり、また、当番の祭司や門衛や歌い手たちもいる。このようにして私たちは、自分たちの神の宮をなおざりにはしない。」

律法には、十分の一を主に捧げるという掟があります。それをまず、レビ人に渡します。彼らは自分たちに与えられた町々がありますが、そこで生活をします。そして、レビ人は、それら受け取ったもののさらに十分の一を祭司に渡します。（民数 18:21,26）そして祭司たちは、ここにあるように自分たちの食べ物のため、また自分たちも捧げるために、宝物倉の中に入れておきます。このようにして、礼拝の奉仕が途切れることのないようにします。しかし、後に 13 章で、この什一がおろそかにされたので、レビ人が生活できなり、自分の家に戻ってしまいました。それで礼拝も滞ってしまったのです。ですから、支援することはそのまま自分の礼拝を守ることでもありました。

礼拝において、こういった現実的、実際的な面をおろそかにすれば、礼拝そのものをおろそかにしていることになります。パウロは、コリントにある教会にこのように指導しています。「Ｉコリ 9:13-14 あなたがたは、宮に奉仕している者が宮から下がる物を食べ、祭壇に仕える者が祭壇のささげ物にあずかることを知らないのですか。同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。」けれども、パウロは敢えてその権利を行使しませんでした、周囲に偽教師がはびこっていて、金を無心する者たちがいたからです。自分自身で働いていました。

最後に誓いは、「このようにして私たちは、自分たちの神の宮をなおざりにはしない。」と言っています。こうやって、礼拝をどんなことがあっても遵守するという誓いを、主にあって立てたのです。私たちの生活が、このように新しく変わらないといけないということです。ここに、神の民が敵から守られ、堅固にされていく土台があります。